

薔薇十字叢書
風蜘蛛^{いばら}の棘

著：佐々木禎子
Founder：京極夏彦



富士見L文庫

contents

風蜘蛛の棘

かぜぐもいばら
風蜘蛛の棘

5

あとがき

274

「私は、蜘蛛くもになろうと思っっているのです」

木枯らしのような、かすれた声だった。

悪声である。けれどどうしてか、蠱惑こわく的な響きを伴っている。

人生を儂はかなんで立つ暗い夜の海で聞く潮騒しほざわを思わせる、聞く者の胸の奥にあるものを暴き立て、呼び込むかのような声であった。

「蜘蛛、に？」

聞き返したのは、十歳になるか、ならないかの、前髪を切り揃えた少女だ。

少女の丸い頬は、その奥に流れる生命力を抑えきれぬかのようにふっくらと盛り上がっている。白を押し上げるように透けて見える血の赤。うぶ毛が淡く光った。

「ええ。蜘蛛に」

少女の前に座る主あるじがうっすらと笑って応じる。

がらんと広い屋敷の、奥の間である。

高い位置にある明かり取りの窓から差し込む日差しが、部屋のひとすみに光の縞模様しまもようを作っている。

この屋敷のすべての窓には、鉄格子がはまっていた。

鉄格子によって描かれた、淡い白と薄墨の黒とを交互に描いた光の三角錐さんかくすいのなかで、埃ほこり

がきらきらと舞っている。

浮かぬ顔になった少女に、主が、問う。

「蜘蛛は、嫌いですか？」

「はい。あんまり……」

「そう」

嫌いなら嫌いで別にかまわないですよ。

主はもう一度笑い、少女の頭を撫でた。少女はきゅつと首をすくめてから、はにかんだ笑顔を見せた。

潮騒の声は、少女を責めない。問いつめない。道ばたで襪履布をまとして眠っていた少女を拾い上げ、いつまでもここにいてくれていいと受け入れ、衣食住のすべてを確約してくれた。身よりのない少女にとってはありがたい場所だ。保護と報酬に対しての、少女に割り振られた仕事は簡単なものだった。館の主の身の回りの世話をし、命じられた用事をこなすだけ。いままでの暮らしと比べて、ずいぶんと楽だ。

ただ、ときどき、館の主の声と表情と言葉に呼応して、少女の身体の奥の柔らかい部分が目の粗い鏡やすりにかけられたようにざわざわとすることがある。

昨夜はひどい雨だった。

豪雨で洗い流された窓硝子の向こう、空が切り取られて歪ゆがんで映る。黒く錆びた格子のあいまに、雨で壊れて穴の開いた蜘蛛の巣が引っかかっているのが見えた。滴を張りつけた銀糸の上を、黒い蜘蛛がせつせと行き来している。

「あ、飛行機ですね。空。いま」

見上げて少女が指をさす。

「ここからは飛行機が飛ぶのは見えません。見たことがない」

「でも……」

「飛行機も好きに飛んでいるわけじゃなく、決められた空を飛ぶものですよ。この館の上空は飛ばないはずですよ」

「でも、いまキラッと光りました」

格子と蜘蛛の巣に区切られて、歪いびに切断された空のあいだを銀の光が行き過ぎたのが見えたのだ。光は、蜘蛛の糸の隙間にふいと吸い込まれるかのようにして、消えていった。

「そう」

主が、少女の頭を撫でる。

「ちゃんと見えました」

むきになって少女が云う。

「そうですね。あなたが見たというのなら、見たのでしょ」

少女は黙って撫でられるままにして、うつむいた。これもまた少女の仕事のひとつだから。

1

人捜しは探偵の仕事ではないのだそうだ。

人に限らず、捜し物全般は探偵向きの仕事ではないらしい。では世間一般において探偵社に持ち込まれる浮気や家出や失せ物捜しの類は誰の仕事かというところ——おもに「ここ」では探偵見習いの仕事ということになっている。

ここは——東京神田神保町に建つビルディング。一階はテラーで地階にはバーがある堅牢な建物の三階にある『薔薇十字探偵社』の応接室であった。

「いいですか。勝手に仕事を引き受けたりしちゃあいけませんよ。こないだもそれで私は先生にこっぴどく叱られたんだ。小口の依頼を受けようものなら問答無用で私まで鹹にされちゃいますよう」

濃い眉と厚めの唇が人目を引く、癖毛を短く刈り上げた髪型の書生風の男——安和寅吉が、お盆を胸元に抱えて咎めるようにして云った。寅吉は『薔薇十字探偵社』の探偵秘書であり、事務仕事や、日常のあれこれと細かいことをひとりでごなしていた。

「わかってます。わかってますって」

寅吉に念押しをされ、益田龍一は、右から左に受け流すように淀みなくへらりと笑って応じた。その口元から八重歯が覗く。

益田は来客ソファにくつろいで座り、耳掃除に余念がない。長くのびた前髪が眉と目元を隠している。口調のせいとか、あるいは態度のせいなのか、益田の言葉はいつもとても軽く、どこことなく胡散臭い。

「ちっともわかってない」

「わかってますって。聞いてますって。寅吉さんの注意をすべて聞き逃してはなるまいと日々こうして準備して耳の調子も整えているわけですから。それに寅吉さんは怒るけれど、依頼人の話を聞いてみないことには、それがうちの探偵向きの仕事なのか、それともそうじゃないのかの分別すらできやあしないわけですから」

「そうですけど」

不服そうに寅吉が云う。

「そうでしょ？ 僕がここで依頼人の話を伺うのは、探偵のためでもあるんだ。探偵が

面白がるんじゃないかってもののは探偵に話を向けるし、それ以外は僕が聞いて調査をする。探偵見習いとして採用された以上それくらいの仕事はしないと」

「採用されたわけじゃなく勝手に居着いただけじゃないですか」

寅吉が、覆い被せるようにして益田の言葉尻をとらえて冷たく告げた。

そうなのだった。

益田はもともとは神奈川県警で刑事をやっていたのだ。それが、箱根の山中でのとある事件の解決に向いた探偵——榎木津礼二郎と巡り会ったせいで、職を辞して上京し、『薔薇十字探偵社』に就職させてくれと頼み込み、結果としてここに住み着いてしまったのだ。

しかし、そもそも益田は、探偵になろうと思ったわけではない。

どだい、探偵というのは職業ではなく称号だというのが『薔薇十字探偵社』の探偵の主張なのであった。探偵は、探偵になるべく生まれつき定められている。事件と世界とを観測し、なにもかもの中央に君臨し、正義のもとに、ときには天誅を加える。

そんな存在は世界にただひとりしかない。

つまり、このビルディングの持ち主である榎木津礼二郎その人こそが、唯一無二の探偵である。

彼以外にこの世界に「探偵」など、いやしないのだ。

そうして、益田は、世界でただひとりの探偵——榎木津に、うやむやなまま「探偵見習い」の地位を与えられたのだ。「探偵見習い」という名称はその時点での榎木津のたままの思いつきでしかなく、原則的には榎木津の下僕として近くをうろつくことを許容されたと云い換えてもいような気もするが。

それはたった二ヶ月程前の出来事であったはずなのに、なんだかずいぶんと遠い過去のように感じられる。

「はい。勝手に居着きました」

益田は軽くそう応じた。

「探偵でもないし客でもないのに偉そうに座って」

どこことなく益田を見下しているような口調である。それも仕方がない。薔薇十字探偵社において力関係の頂点は常に榎木津礼二郎であり、次が寅吉で、最下層が益田ということになっている。

「はい。偉そうに座ってます」

鸚鵡返しに帮問の口調で返す。

「暖簾に腕押しな返事をしないでくださいよう」

寅吉が口を尖らせて文句を云う。

慥かに益田は、腕押しをしたらしたきり、ずっと奥まで翻つてもとに戻らない暖簾のよ

うな男である。

上がり気味の細い目に尖った顎。繊細そうに見えなくも風体だが——とにもかくにも前髪が益田の表情の大部分を隠してしまっている。目は口ほどにものを云うというが、益田に限ればその諺は嘘だ。前髪の暖簾が隠してしまう目は益田の心中を表さないし、饒舌な軽口は留まることがない。

「そうは云ってもなにもしないでしたら干上がっちゃいます。寅吉さんだって事務所の経営状態にやきもきしていたじゃあないですか。くり返しになりますかね、僕ア、榎木津さんに仕事をさせようなんて、はなっから考えたりしてません。あの人はいつだって仕事なんてしたくないって云っている。だから探偵向きじゃない仕事を、僕がここで分別してやるんですよ。失せ物だの家出人捜査だの普通の仕事は僕がやればいいわけです。僕は調査やら聞き込みやら、地面に這いつくばったり壁にへばりついたりする仕事は、わりと上手くやり遂げられる。なんせ元警察官ですし」

「そうでしょうけど。怒られるのは私なんですからね」

「いやいや。寅吉さんが怒られるときは僕も一緒に怒られる。むしろ僕のほうこそがこっぴどく怒られる。なんせ僕は榎木津さんの弟子ですから。師匠に怒られるのは弟子の本分みたいなもんですし」

真顔で答えると、寅吉がぎょろりと目を剝いた。

「弟子だとか見習いだとか勝手に名乗って……」

「でも、慥かに云いましたからね。僕のことを弟子にするって、榎木津さんは。寅吉さんも聞いていたでしょう？」

「私が覚えてても、うちの先生は自分の云ったことなんて忘れちゃってますよ」

寅吉が呆れた顔で云う。とはいえ寅吉は、益田が居着いてしまったことに対していつまでも文句は云わないのだった。おかげさまで勝手に居着かせてもらっているし、寅吉とは中中上手い具合に過ごせている。

「まあ、その通りですがね」

益田は同意し、肩をすくめた。

榎木津は、とにかく気まぐれなのだ。昨日自分で云ったことを今日も覚えてるかというとか定かではない。自分で断言したことを翌日には自らひっくり返して正反対のことを云っていたりもする。周囲は榎木津に振り回されっぱなしだ。

けれど秋の天気よりさらにめまぐるしく移り気に見えていて、どういうわけか榎木津の主張も行動も、常に一本筋が通っているから、厄介なのだった。

榎木津『神』の真意は下々の者にはわからないことばかりという、それだけだ。

「それからね、昔はともかくいまはうちの事務所は潤ってるんだ。前の事件で先生が大活躍をしてくれた報酬がある。だから小口の事件を拾う必要はないんだよ」

仕事のえり好みをする割に——否、しているからこそなのだろうか——榎木津の事件解決の報酬は大口で高額なものばかりである。しばらくは働かなくても食べていけるようなのだ。

「わかってますって」

「本当ですかねえ」

しかし寅吉は小言をひとしきり云ったことで納得したのか、お盆を抱えて奥へと戻っていった。

と——。

探偵社の入り口の扉が開いた。

カランと、入り口に仕掛けられていた鐘が鳴って来客を知らせる。

「いらっしやいませ」

益田は耳掃除の手を止めた。

——妖怪洋物河童!?

現れた人物を見て、益田の頭に、はなはだ失礼な言葉が浮かんだ。

外国人の、河童が、いた。

青い目に、彫りの深い顔だち。長身で、手足が長くひょろりとしている。

頭頂部の一部が桃色に光り輝いてつると禿げ、河童の皿のようだった。潔い禿げでは

なく、禿げのまわりを取り囲むように金の髪がべたりと纏わりついているため、ことさらに河童感が強い。

「名探偵榎木津礼二郎さんがいるという、薔薇十字探偵社はこちらでいいですね？ 人を捜して欲しいんです」

妖怪洋物河童は、真っ直ぐに益田を見詰め、そう口を開いた。

日本語である。

河童語でもなく米国語でもないのだった。

鐘の音を聞いて、奥に戻っていた寅吉が再び顔を出す。

「……いらっしやいませ。益田君、お客様だよ」

寅吉はまず客へと声をかけ、次に益田に対して咎めるように続けた。益田は、寅吉の言葉で、自分が来客用のソファに座っていることを思いだす。

益田はすっと立ち上がり笑顔を浮かべ告げた。

「どうぞどうぞ。温めておりました」

べらりと出てきた言葉には、軽さを表現する以外の意図はない。

すかさず寅吉が益田へと尋ねた。

「温めてたって、何をだい？」

「ソファをですよ。お客様のために。四月の半ばとはいえ今日はなにやら寒い。どうぞ。

この温かいところに」

にこやかな笑顔で客にうながすと、客は「Oh!」と、あきらかに日本語ではない陽気さで声を上げ、大股で歩いてきて益田の代わりにソファに座ったのであった。

寅吉が淹れた珈琲が客の前に置かれている。

なぜなら依頼人は、依頼人としては珍しく、手土産に菓子を持参していたからなのだ。菓子だけをもらって話も聞かずに帰すわけにもいかない。寅吉も益田も、そういうところは善人なのである。

依頼人が流暢な日本語で手早く自己紹介をし用件を話すのを、益田と寅吉は対面の椅子に座って神妙に聞いている。

依頼人はジョン・ウィリアムスと名乗った。さらに自分は過去、GHQに所属していたのだとも。日本語が堪能なのはかつて日系人の隣人がいて、教えてもらったためだという。語学の能力を見込まれて、昭和二十七年のGHQ解散まで日本に滞在し、職員として働いていたのだそうだ。

「GHQの職員だったんですか……そりゃあ」

益田と寅吉は思わず顔を見合わせた。

「誤解しないでください。今回の依頼はプライベートなものです」

GHQ——連合国軍最高司令官総司令部とは、第二次（世界）大戦後に、日本で占領政策を実施した連合国軍機関である。GHQの権力は強く、益田が神奈川県警に所属していた際に、先輩刑事から「昔はよくGHQが警察捜査に強引な横やりを入れてくることがあった」と、苦い思い出話として聞いたことがある。とはいえ、もはや終戦から八年。GHQも当初の目的であったポツダム宣言の施行という目的を遂げ、昨年、解散されている。

「元GHQの職員としてここに来たわけじゃないんです。ただ、自分の立場を伝えることで、俺の本気が伝わると思っています。薔薇十字探偵社の名探偵は気まぐれで、中事件の依頼を引き受けてくれないと聞いています。それでも俺は、武蔵野連続バラバラ殺人事件や連続目潰し魔事件を解決したという名探偵の力を借りなければ、この人捜しは無理だと思っただんです。とにかく俺はこの人捜しのために自費で戻ってきました。その気持ちを汲んで欲しいんです」

益田と寅吉は、やはりまた互いに顔を見合わせた。

「だから俺にはあまり時間がありません。日本に長居もしてられない。それをわかってもらいたいです」

真剣な面持ちでジョンが云う。

益田はついつい情けない顔になった。榎木津に探偵仕事を依頼する人が真剣であれば真

剣であるだけ、益田は、困る。

「とりあえずお話を伺うだけは伺いますがね——人捜しの類は、榎木津は引き受けられないことになっているんです。うちの探偵が得意としているのは、物事の混乱です」

「混乱？」

ジョンが聞き返す。

「そうです。混乱とか、ぐちゃぐちゃにするとか、そういうのが得意なんだなあ。もうそろそろそのあたりのことが高名天下に鳴り響いて、なにかもをぐちゃぐちゃにしたいから頼みますという依頼が、榎木津のところに来てもいい頃合いだと思っただけでねえ。それでしたら、僕も、清々しい気持ちで榎木津に子細を伝えるところですが。なんていうのか、期限が定められていようと、いまいと、うちの探偵は捜し物はしないうです」

相手が元GHQの職員であろうと——権力者につながっている可能性があるだろうと、なからうと——榎木津は人捜しに食指が動くことはないだろう。ということは、これは、益田の仕事である。

「まずは僕がお伺いしましょう。榎木津はそもそも捜査も調査もしないのです。それどころか依頼人の話も一切聞きません。話を聞くのは専ら僕だ。僕はこちらの探偵助手で、益田と云います。助手とは云え、前職が警察官でしたので捜査のイロハは心得ている。これでけっこういい仕事をします」

寅吉が益田の隣でむっとした顔をした。

「益田君。勝手に小口の依頼を引き受けられないようになって、さっき云ったばかりですよ。先生を怒らせたなら、鹹にされてしまうじゃあないですか。先生が起きてくる前に帰っていただかないと。見つかったら大変だ」

榎木津は奥の部屋で眠っている。起きてきて依頼人の姿を見つけて——依頼内容が「つまらない」ものだったら怒りだすかもしれない。

「大丈夫ですよ。榎木津さんは昨夜『なんだか寒気がするぞ』って云って酒を飲んで早早に寝てました。ありゃあ風邪ですよ。まだしばらく寝てるんじゃないかな」

「うちの先生はあれで身体が弱いからなあ。いや、だけど早急に寝たんなら早急に起きてくるかもしれないじゃないか。駄目ですよ。やっぱり帰っていただかないと……」

「そうは云っても、寅吉さんが珈琲を淹れてきてくれたわけですから。珈琲を飲んでるあいだに、ちょっとした茶飲み話をする体で、聞くだけは聞きましょうよ。もしかしたらここから突然、探偵向きのお天烈な内容になることもあり得るわけですから。ほらほら、聞くだけは」

「ああ。私はなんで珈琲なんて淹れてきちゃったんだろう」

益田は寅吉を「まあまあ」とどこまでも軽く宥め、ジョンに向き合う。

ジョンは、益田と寅吉の話に危機感を覚えたのかもしれない。早く話をしなくては、な

にも頼むこともできず帰されるのではと思ったのだろうか。いささか食いつき気味に身を乗りだして、口を開く。

「東京ローズを捜して欲しいんだ」

「東京ローズ？」

益田は尖った顎を指でぼりぼりと引っ掻いて、首を傾げる。

聞いたことは、ある。どこで聞いたのだったか記憶を掘り下げる。

「知らないかな。USAでは有名だった。俺たち兵士は——誰が一番先に日本に上陸して東京ローズにキスをするかって云い合ったもんだが」

「ああ。そうか。戦争のときにラジオトウキョウの？ 女性アナウンサーの愛称が『東京ローズ』だったんでしたっけ。生憎と、当時、僕らは電波の受信を禁止されていたから、聞いたことはないんだ」

日本軍が太平洋戦争中におこなった連合国側向けプロパガンダ放送の女性アナウンサーに、アメリカ軍将兵がつけた愛称が——東京ローズだった。

いま思えば不思議なものだ。戦争当時、日本国民は短波放送を聞くことを国によって禁じられていたのである。国民は、日本という島国のなかに「電波的に」囲い込まれていた。海外の人びとは自由に電波を受信し、世界の情勢を知ることができたというのに、日本のなかの人びとは世界から隔離され情報を遮断されていたのだ。

軍部と外務省の人間たちだけが、世界中から流れてくる短波を受信し、解析することができた。

そういう奇妙な環境が確保されたがため、日本から敵国に向けてのプロパガンダ放送を発信するということが可能になった。ラジオでなにをどう語ったところで、日本国民はその放送を聞くことはできない。「お国のために」と日本兵たちは異国で己を鼓舞し戦い続け、国に残る者たちは銃後の守りに努め、戦死こそが名誉な死に方だと讃え——一方、ラジオトウキョウからは、国を挙げて、敵国の兵士たちに向けて反戦思想について語り続けたのだという。

戦争の素晴らしさを煽り続ける体制のなかで、相反する反戦について放送をすることが当時は可能だったのだ。

国民はその矛盾に気づくことすら、なかった。

「そうだ。戦時に『ゼロアワー放送』っていうラジオ番組が、毎晩、深夜に、日本から放送されていた。ゼロ・アワーってのは、決定的瞬間っていうか、弾丸を発射する瞬間みたいな意味で、戦争のときに前線で待機して命令を待っている兵士にとっては、死ぬかもしれないという緊張と不安の時間のことだった。だから『ゼロアワー放送』ってタイトルでラジオが流れてきたら、俺たちは、聞き入ったものさ。どんな決定的瞬間の、なんの命令がくだされるのかって。ところが、その放送は、気怠く色っぽい声をした女性が英語

で話しかけてくるものだった」

その女性アナウンサーに米兵たちがつけた愛称が——東京ローズ。

「俺たちは東京ローズに夢中になった。ローズはたぶんひとりじゃなかった。何人かの女性たちだった。日によって声や訛りが違っていたからね。そのなかで、ひとり、とても気になっているローズがいてね。綺麗な声っていうわけじゃあなかったな。むしろあれは悪声だったかもしれない。もっとももう記憶の彼方だし、勝手に脳が上書きして、理想的な声に変換している可能性もある。それでも、とにかく——かすれた低い声で、俺に語りかけてきた彼女に、俺はぞくぞくしたんだ。流行の音楽の合間に、彼女はこう云うんだ」

こんな具合にさ、とジョンは声をひそめ抑揚をつけて語る。

「ジス・イズ・ゼロ・アワー……フローム・トウキョウ。太平洋のみなしごさん、あなたたちのお船は全部沈んじゃったのよ。どうやっておうちに帰るつもり？ 今頃あなたたちの奥さんや恋人は他の男とよろしくやっているわ。それから、そう……どうやって調べたのかまったくわからない個人情報云うのさ。『二十五海兵師団の誰それに、誕生日おめでとう』だとか『故郷で待つ妻に無事に子どもが生まれた、男の子よ、おめでとう』だとかね。それが当たっていいね。云われた奴は『どうしてそんなことを知っているんだ』って大騒ぎさ」

「おそらく俘虜の兵士から情報を聞きだしてアナウンスしていたんでしょうね」

益田は推察し、告げる。

「そうだろう。わかっているさ。だが、理性では俘虜情報だろうとわかっても、深夜に自分に向けてささやかれる女の声ってのは……魔女の声みたいに聞こえたときもあった。

俺は当時、飛行機乗りだったんだ。爆弾をぶら下げて空を飛んでる最中に、ときどきぶつと東京ローズの言葉が脳裏に浮かぶことがあったよ。空に、俺の目には見えない電波の糸が張り巡らされているような気がしてね。電波はまるで蜘蛛の巣だ。東京ローズはその電波の巣の中央で、俺の飛行機をからめとろうとして待っている。そういう幻想に身体が芯が冷えたね」

「はあ……。なるほど」

人の目には見えない磁場を張り巡らせている青い空。電波は、薔薇の花びらのように、幾重にも重ねられている。飛行機が薔薇の磁場のなかを飛んでいく。日本の上空から焼夷弾をばらまく。飛行機乗りの死を待ち構える蜘蛛が蠢惑的な声で告げる。女性の声で——。

「それでなんでまた、東京ローズを捜したいんですか？」

益田は尋ねた。

「青春だったって云い方になるのかもしれない。その象徴が、俺にとっては東京ローズなんだ。日本で働いているときも捜したが、俺のローズは見つからなかった。仕方ないと思って国に帰った。でも、日本を去っても俺の夢に出てくるんだ。東京ローズがさ」

「はあ」

「だったら私財を投じて、ひと目会うために捜してみたいと願ったところで、おかしくないだろうか？ 組織や、面倒な知り合いを通すと、大変なことになるのはわかっているんだ。いまさら世間に引っ張り出してしまえば、東京ローズの迷惑になる。そうじゃないんだ。俺はただ、俺の気持ちのためだけに、東京ローズを捜して、会いたいんだ。正体を明かしたいわけじゃない」

戦争という特殊な状況のなかで偶像化した東京ローズのこととは、そのまま偶像として放置しておけばいいではないか。いまさら掘りかえしてどうなるというのか。

と反射的に思うのと同時に——「わからなくもないような」と感じる部分も、益田には、うすぼんやりとあるのだった。

たとえば——益田が警察を辞職して、薔薇十字探偵社にやって来たときの心模様は、それに近いものがある。榎木津は別に益田の青春の象徴ではないし、偶像でもないのだが、それでも益田は榎木津に「会いに」上京したのである。

榎木津は慥かに益田の心を揺さぶった。

それまで自分の日々につく類の不安も不満もなかった益田の心は、益田の身体という容器とびったりと合致していた——はずなのだ。特に目立った隙間もなく、みっしりと詰まっているように思えた自分の内部に、益田は疑問を抱かなかった。見ないふりをして

いたのかもしれないが。

けれど、突然登場した榎木津という存在に強い力で揺すぶられ、詰まっていたはずの内部に、空間が生まれた。

不思議なもので、ひとつの袋のなかに隙間もなく荷物を詰め込んで、もうこれ以上は入らないだろうと思っても、揺すぶってみると荷物と荷物のあいだには隙間ができてしまうのだ。

益田が抱え、内部に仕舞い、心という袋に積み上げたものは、小さな欠片の寄せ集めだ。みっしりと詰まっていたはずの中身が、外からの強い力に袋ごとがらりと揺らされ、形よく収まっていた定位置から外れて、崩れていった。瓦解していった物と物とのあいだに、隙間ができる。

自分の身体と自分の内部には、隙間がある。なにか虚ろな穴がある。それがなにかはわからない。わかっているのは、益田がそれに気づいたのは、榎木津に出会ったゆえだという事実だけだ。

隙間がある。まだ入る。けれどおそらくこれ以上物を詰めると——さらに自分は重くなる。

重くなると感じたときに、益田は、強く「軽くならねばならない」と願った。隙間に物を詰めてみっしりさせるより、もっと軽くならねばならない。

そのすべては榎木津に端を発している。おそらく、榎木津はそういう化学反応のようなものを他者に引き起こす質なのだ。益田だけではない。榎木津の古くからの友人である古書店の店主が云うには——「榎木津とつきあうと、馬鹿になる」のだそうだ。

だから益田は、馬鹿になった。

そしていま探偵助手をやっている。

東京ローズがどんな人物かは益田には不明だけれど、東京ローズにひと目会いたいと願うジョンの気持ちには、ぼんやりと理解できそうな気がする。

「東京ローズのひとは、自分がローズだって云ったんじゃないんですかね？」

宣言した女性がいたはずだ。正体を明かした日系二世の女性の顔は覚えていないが、話題になっていた。

「ああ。だが、あの女性は俺のローズじゃない。声が、違うんだ」

「声が？」

「訛りも違う。俺にささやきかけてくれた東京ローズは、英国女王みたいな話し方をするんだ」

益田の耳では聞き分けられないが、英語にもそれぞれの出身地特有の訛りがあるものだろうだ。方言のようなものなのだろう。

「しかし元GHQが捜せなかったものを僕に捜しだせるかっていうと、どうだかなあ。僕

アそこそこ無能じゃないが、でもそこまで優秀でもないからなあ」
「だからプライベートなんだ。元GHQは関係ない。それにまったく手がかりがないわけじゃない。ある一時期、ローズは東京の華園小路の家にかくまわれていたっていう情報を内密に入手している」

「華園小路？ 立派なお名前ですなあ。しかも内密について。それはつまり」
元GHQならではの情報網を使って入手したという意味ではないか。それはあからさまにきな臭い。関与しないほうがいい類の大きな事件の匂いがした。

益田はこれで存外、勘働きもするのである。自称通りに「そこそこ有能な探偵見習い」なのだ。

断ろうかと、口を開きかけたとき——。

奥の部屋へと続く扉が勢いよく開く。

榎木津礼二郎の登場である。

「Oh!!」

ジョンが、榎木津の顔を見て口をあぐりと大きく開けた。榎木津は、見る者が思わず声を漏らすくらい的美貌なのである。人は、まず榎木津の西洋骨董人形のごとき整った容姿に驚き、そのあとは榎木津の言動と奇怪さと常人には理解不能な人となりに驚く。彼は、いつも新たな驚きを周囲の人に与えるという希有な人材なのであった。

「榎木津さん、起きてたんですか」

益田が慌ててそう云った。

「見ればわかることをいちいち聞くな、馬鹿オロカ。だからおまえはマスオロカなのだ。僕が起きると日が昇る。僕が寝ると日が沈む。真理だ！」

榎木津が決然とそう断言する。

見目麗しい西洋人形のごとき容姿に、奇妙奇天烈傲岸不遜な性格を詰め込み、己を神と定めた唯我独尊思想の神経を全身にくまなく張り巡らせる榎木津礼二郎という人間になるのだった。

榎木津はどこで調達したのか、女性物らしい赤い布地に白い大きな花が咲いた模様の半袖の襯衣を羽織っていた。普通の男が着ると突飛過ぎて笑いものになるところだが、榎木津だと不思議と様になってしまふ。

しかも手には毛布を持っている。腰に巻き付けて、ずるずると引きずっていく。襯衣の布は薄いの、毛布で下半身を防備して、薄着なのか厚着なのか判断のつかない出で立ちである。

榎木津の薄い茶色の硝子のような双眸の焦点は、何処にも合っていない。

真っ直ぐ大きな机に歩いていき、べたりと座る。机の上には『探偵』と書かれた三角錐が載っている。そこが榎木津の席だ。

榎木津の入室に、寅吉と益田は顔を見合わせた。つまらない人捜しの依頼を聞いている現場に、探偵が登場してしまった。細かな話を説明したら榎木津はふたりに鹹を言い渡すかもしれない。

「……和寅、珈琲」

榎木津が命じた。榎木津は寅吉のことを「和寅」と呼ぶ。椅子の背もたれに体重をかけて、軟体生物のようにくたりとなつて、いまにも溶けてしまいそうな様子だった。いつもより若干、精彩を欠いて見える。やはり榎木津は風邪を引いているのかもしれない。

「はい。先生、すぐに珈琲をお持ちいたします」

寅吉が勢いよく立ち上がる。叱られるとしたら、益田ひとりにその叱責をまかせようという魂胆であろう。益田はすっかり逃げそびれ、さてどうしたものかと天井を見上げた。

「あの……彼が、名探偵榎木津礼二郎さんですか？」

ジョンが小声で聞いてくる。

「はい。彼がその名探偵です」

「武蔵野連続バラバラ殺人事件をはじめとするいくつかの難事件を解決したという、あの」

「はあ。だけど、この探偵は人捜しはしないんですよ。それは僕の領分なんだ」

ジョンの目に期待の光が灯るのを、益田は嫌な予感と共に見つめた。

「不思議な力を持っていると噂で聞きました」

「噂で？ まあ力もなにも——本体そのものが奇天烈で不思議なんですけどね。うちの探偵は」

「俺は学生のととき精神医学を専攻していて」

「はあ」

その先を待ったがジョンはそれきり口をつぐんだ。

少しのあいだ溶けかけていた榎木津は、毛布をどきりと床に落とす、長い脚をひよいと机に載せた。ぐらりと身体を揺らして顔を上げ、そこでやっと榎木津の視界にジョンが入ったようだ。

榎木津は、興味のないものには視線を留めない。

ということとは——ジョンには、なにかしら榎木津の興味を引くものがあつたということか？

「あ」

榎木津の顔が弛緩した。だらしなく口を開け、ジョンの斜め上あたりを凝視している。

益田は榎木津の視線を迫るように、ジョンの背後を見つめた。

なにもない。益田に見えるものは、ジョンの河童のごとき禿頭だけである。

「手紙……。それから、石だ。石だなあ。石を魔法瓶に詰めて、どうしたいんだ。魔法瓶に詰めるのは石じゃあないぞ。飲み物だ。熱かったり冷たかったりの——飲み物を詰めた

まえ！ だいたい石より飴だ。飴のほうがいい！ 飴は、あまあいからな。ああ、喉が渴いた。和寅！」

榎木津が云う。なにを云っているのかは常人には理解不能だ。

「はい。ただいま」

寅吉が淹れたての珈琲をお盆に載せて運んでくる。榎木津の机の上にそっと置く。室内に珈琲のいい香りがしている。

榎木津礼二郎は——人の記憶を「視」る。

理屈をつけて説明されても、益田には理解できないことだった。が、とにかく榎木津は、人がそれまでに「見」たものを、その人の背後に「視」ることができらしいのだ。

だから榎木津は事件を瞬時に解決する。犯罪者の「見」たものを「視」ることで、榎木津は犯人を見つけだす。別に大層な犯罪だけではなく、榎木津はありとあらゆる人びとの「見」てきたものを「視」てしまう。光景を選ぶこともできず、順番もばらばらだ。十年前のことも今朝のことも、ごちゃ混ぜになって、榎木津の意志とは無関係に一方的に「視」えてしまうものらしい。

ならば——彼が己を神と断定するのも、やむなしだ。

榎木津の茶色の硝子の目の前では、隠し事は不可能なのである。

「名探偵、榎木津礼二郎さん。俺はあなたの噂を聞いて、依頼に来ました」

ジョンがソファから立ち上がり、榎木津に向かって声を上げた。

榎木津は、ふわあと大きなあくびをした。猫のような仕草である。

「東京ローズを捜して欲しいんです！」

真摯な口調でジョンが榎木津に詰め寄った。榎木津は退屈そうな顔つきで、ジョンを見返す。

「唐辛子だろうが蠟人形だろうがつまらないものはみんな探偵助手の仕事だ。捜しものは探偵の仕事じゃあない。人助けも探偵の仕事じゃあないぞ」

叱責される覚悟を決めて、榎木津の次の言葉に向けて姿勢を正す益田だった。馬鹿だオロカだの言葉はもちろん、時には物も飛んでくる。榎木津の様子を見極めて、場合によっては隣のお勝手に逃げださなくてはと身構えた。

そこで——榎木津がふいに「あ」と、また短く声を上げた。

「なんだ。光ってるぞ。光ってるな！」

続けて「あははははははは」と大きく笑いだす。

「いい禿頭だ。やあ、まるで河童じゃないか。きみは河童にそっくりだなあ。僕の下僕にも河童に似た男がいるが、きみも堂々とした河童男だ。よし胡瓜をやるう！ 河童なら石

を魔法瓶に詰めるのも許す。光ってるから詰めたんだな。相撲も好きだけとるといい。

ふふ。チョコレエトに飴も詰めるのか。河童なら泳ぐ！」

益田は絶句した。益田が思っても云えなかったことを、榎木津はてらいなく堂々と云ってのけるのだった。大人ならば配慮して口に出せないひと言であっても、まったく気にしないのである。榎木津はよくこうやって人の外見の特徴をあげつらい、笑う。云われた相手は憤慨し怒りだしたり赤面したりするが、榎木津は常時、正直なことしか云わないのである。

たまに榎木津の笑い声に「正直者は馬鹿を見るならぬ、正直者の馬鹿笑い」という戯れ言が益田の脳裏に浮かぶが、口に出したら「僕の笑いは正直者の神笑いだ。馬鹿はおまえだ」と叩かれそうなので云えないでいる。

「捜しものも人助けもしないのならば、では探偵はなにをするのですか？」

最初は榎木津の奇天烈さに呆気にと取られたようだったジョンだが、榎木津を真っ直ぐに見返してそう尋ねた。素直な子どもみたいな聞き方だった。

「探偵は秘密を暴いて真実を探る唯一無二の存在だ。それが探偵であり、つまり僕だ！

カスオロカ！」

「はいっ」

益田の名前を、榎木津はちゃんと呼んだ例しがないのだった。益田が益山や益川になる

くらいは、いい。マスオロカはまだしもマスが残っている。しかしカスオロカになると、スしか合っていないではないか。

「河童さんの云うことを聞いてあげるといい。助けるのは助手の仕事。河童さんの捜し物は胡瓜だな。胡瓜を捜すべきだ。よしオロカ、立派な胡瓜を捜してあげなさい」

榎木津は人の話を一切、欠片ひとつも、聞いていないのである。

けれど——ジョンの存在のなにかが榎木津のつぼをついたようだった。叱られることなく、ジョンの依頼の人捜しを、益田は榎木津に申しつけられたのであった。

いまだ益田は東京には不慣れなままだ。それでも目に入る景色に馴染みつつある土地がいくつかできてきていた。そのひとつが中野である。

中野の大通りはついこのあいだまで道沿いに桜が淡い桃色に空を霞ませていたが、今日はすっかり葉桜だ。落ちた花びらが溜まり道の端は長く白い。見上げると若い色合いの緑が、柔らかく日差しを弾いている。涼やかな風に葉と枝を揺らされ、木々がさやさと囁くように音を鳴らしている。

電線が空を区切り、黒い糸を縦横に渡している。

東京ローズを捜してくれという依頼を受けた益田が薔薇十字探偵社を出て向かったのは、中野の外れ——だらだらと傾斜が続く眩暈坂を登り詰めたところにある古書店『京極堂』であった。

京極堂は変わった店だ。古書店であるので、当然ながら、売るほど古書が置いてある。しかし益田は京極堂で客が古書を買っている姿をまだ見かけたことがない。店主である中禪寺秋彦はいつも全世界が何事かで減んでしまったかのような仏頂面で眉間にしわを寄せ、売り物の古書を読んでいるのだった。

趣味で本を集めて読み漁っている延長で、古書店を開いたのではと思われる節があるのだが、当人によると古書店が本業なのだそうだ。本業とは別にある家業は神社で、神主だ。それだけではなく請われると、陰陽師として憑物落としも行っている。

扉には、店主自らがしたためた、達者なようでもあり自己流の極みのようでもある『骨休め』の札がかかっていた。この札がかかけられているとき、店主は店先にいない。店は開いていないようだ。

そのまま益田はぐるりと母屋のほうへと足を進める。事前に電話を一本入れてから出向いたので、追い返されることはないだろう。玄関先から声をかけるより先に、中禅寺が誰かに教え諭すように語りかけている声が聞こえてくる。中禅寺の声は深みがあり、大きな声を張り上げているわけではなくても、実によく通るのだ。

対して、叱られている相手の声はまったく聞こえない。

「ごめんください。」

益田の声に、客間から「入り給え」と中禅寺が応じた。中禅寺の細君は不在のようだ。この家において、妻不在のときは客は好き勝手にふるまうしかない。

廊下を歩いて奥の間に近づくにつれ、先客についての心当たりがついてしまう。中禅寺に叱られて、かつ、はきはきと云い返すこともできずうつむいて小声で「うろうう」と言葉を含み込んでしまふ人物は——関口巽せまぐらつみしかいない。

案の定、襖を開けると、そこには関口巽が背中を丸めてうつむいて座っていた。

もし猫背選手権というのが広く開催されたならば、関口はおそらく関東代表あたりに選出されるであろう。たいした背中の丸まりぶりである。

益田は関口の隣に座る。関口はちらりと視線を上げて、しょぼくれた顔つきで益田に「やあ」と云う。

蚊の鳴くような声なのに聞き取れるのは、益田の日々の耳掃除たまものの賜だろうか。

「やあ、じゃないですよ。関口さんは今日もまた相変わらず不元氣そうで」

「不元氣そうって、なんだい。それは」

「そのままですよ。お元氣その反対です。まあ、人間みんながいつもうちの探偵くらいに元氣で躁状態さつちだったらめまぐるしいですから、関口さんみたいな人が世の中の空気を中和してくれていると思うと、ありがたい。どうぞ関口さんは、もうずっと不元氣なまま

いらしてください。応援します」

まだ短いつきあいではあるが、益田の見たところ、関口はいつも「世間という大きな手に丸めて捨てられる寸前」の風情がある。それが関口の個性であった。

中禅寺の視線は、卓上にある書物の文字を追っている。うなだれて反省する関口を見るのでもなく、入室した益田を見るのでもなく、書物をひたすら読んでいる。利休鼠りきゅうねずの着物を身を包み、凶悪な顔つきだ。いつも通りの中禅寺である。

関口は、益田の軽口に「ああ」とも「うう」ともつかぬなにかをつぶやいてから、悲しげな表情で告げた。

「不元氣にもなるというものだよ。この春から妻が外に働きに出て」

「はあ」

「すべては僕がふがいないせいだ。だから、このままではいけないとさすがの僕も奮起しようとしたんだ。僕はね、久しぶりに小説を書いたんだ。しかも僕にしてはすごいことに二作同時に書いている。快挙だよ。気分が盛り上がって、ちょっとはいいことを云ってもらうつもりで友人に読んでもらった」

関口巽は——小説家なのである。

寡作であり、かつさほど人気作家ではないようで、たまにカストリ雑誌に別の筆名で記事を書いてしていると聞いている。

が、細君が働きに出たというからにはカストリの記事を書く程度では食いつないでいけなくなつたということであろう。それは発奮せねばなるまい。いかな関口であろうとも、だ。

「僕は関口君の友人じゃない。知り合いだ」

中禅寺がびしやりと告げる。関口の眉尻まゆじりが下がり「ううう」と口ごもる。

中禅寺と関口は学生時代からのつきあいのようだが、中禅寺は頑として関口を友だちとは認めないのだった。常に「単なる知り合い」だと云い張る。だが、益田からすると頑かたくな知人扱いをするというこのやり取りが、いかにも旧知の仲のあいだでのみの符丁かたぐのように、仲睦なみちまじさを感じさせるものだった。ことさらに友人だと云いたがる関口に、毎回、友人ではなく知人であると応じる中禅寺。中禅寺の返しに傷心の表情を見せる関口と、それを無視する中禅寺というところまでの流れは、ふたりにとつての無意識の「お約束」のように見える。他者には窺うかがえないふたりの過去の時間の共有が垣間かいま見える気がする。

関口の額から汗がぶわっと噴うかき出ている。

「関口君は書き上げたかのような口ぶりで自慢げに云うが、両方未完だ。途中の原稿の、どちらが小説としての体を成しているかと聞かれたから、比較するならばこちらだと素直に意見を伝えたただけだ。云われなければ意見など述べるはずもないのに、どうしてもと請うてきて、答えた途端に泣き言を云う。あまつさえ聞いてもない弁解を並べだす。君が

まがりなりにも小説家だと云うのならば、反論はせめて小説にしたため給えよ」

中禅寺の声が部屋に響く。

「泣き言も云いたくなるさ。最初に君はどちらも小説ではないかと切つて捨てたじゃないか。それでもどちらかは小説になっていないかと尋ねて、やっと、どちらかというならこっちだと云う。しかも嫌嫌だ。僕はね、友人知人だからといって京極堂に読んでもらつたわけじゃないんだ。毎回、どう思ふかと君におそるおそる意見を聞きに来る度に、きつい感想を返されて地の底まで落ち込んで帰っているからね。知り合いだからといって京極堂の僕の小説への意見が変わることがないのは知っている。手心を加える意見じゃあないから信頼もしているんだ。でも、割わり箸ばしの入っている箸袋に書かれた文字ですら読む男が、僕の小説を、小説じゃあないと云う。ひどいじゃないか」

よく見てみれば卓上には原稿用紙の束が二つ置いてある。一枚目に表題を大きく書いて綴とじられている束のひとつには『風蜘蛛かみぐも』と書かれ、そしてもう片方には『獨吊どくちょう』と記載されている。

関口が、益田へと顔を向けて訴えた。実際、とてもつらそうである。

外見の特徴のきわどいところをあげつらうのが得意な榎木津は、関口のことを「猿」と呼ぶ。強いて云えば毛深いところと、赤面症ですぐに赤くなる顔が「猿」かもしれない。

こんなに陰鬱いんうつそうで弱気な「猿」を益田は見たことがないが。

中禅寺は関口を真っ直ぐに慰めはしないのだった。だから益田は当たり障りなく、関口を宥めることにした。あまりにも悲壮な顔になっていくから放っておけなくなったのだ。「はあ……そりゃあ困りましたねえ。でもそうは云っても、もう関口さんは小説家になっているんだから、そういう人が書いたものはどんな内容でも小説なんじゃないですか?」「だがね、京極堂は僕の作品は小説ではなく体験談だと云うんだ」

「私小説だと云っただけだ」
「同じようなものだ。巷で僕が評価されている幻想小説の枠組のものではないと云ったじゃないか。実際……それもそうなんだ。わかってるんだ。僕はずっと幻想小説どころか小説を書いた例しなんてない。見えていることしか文字にできないそんな人間なんだ。私小説でもないだろう。体験談さ。小説家でございなんて堂々と云えないよ。才能の欠片もないからね。だからこそ、僕は、自分の知り得ない事実を基に小説を書き上げようとしたんだよ。君たちが春に体験した、例の——蜘蛛屋敷の事件の伝聞を僕なりに知らないことが書いたらそのときは僕も、とうとうちゃんとした小説が書けたと胸を張れるかと思つてね」

「蜘蛛の?」

益田の胸の奥がざわりと蠢く。

蜘蛛屋敷と云われる複雑な構造を持つ屋敷で陰惨な事件が起きた。ほんの先日の、春の

出来事である。蜘蛛の巣を張り巡らせたなかに、人と事件がまばらに巻き込まれ、糸にかめとられて蜘蛛の巣の主の迷惑のまま——大層、人が、死んだ。

益田も、蜘蛛の事件に巻き込まれ、右往左往した口である。

最終的に事件は榎木津が解決し犯人を捕まえ、中禅寺が関係者全員に取り憑いた憑物を落とした。

そう云えば、珍しく関口は蜘蛛屋敷の事件には関わらなかったのである。益田が関口にはじめて出会ったときから、関口は難解な事件に何故か巻き込まれて、酷い目に遭つてばかりいたのだったが。

「そう。だから比較するなら、二作のうち、蜘蛛の話は幻想小説になりかかっていると答えただろう。感想を聞かれたら感想を云うし、文章について問われたら文章の間違いや比喩表現の拙さを指摘するし、どちらがより幻想小説に近いかと聞かれたらその問いに答えるまでだ。関口君は僕に二作のうちどちらが幻想小説かと聞いたんだ。小説かどうかなんて聞かれていない」

中禅寺はべらりと書物の頁を捲りながら、云う。話の最中、ずっと視線は書物の活字を追いかけている。

「それは……君が僕の書いたものは幻想小説ではないと云うから、ならば僕のは体験手記だと重々反省したんだ。それで今回こそは少しは小説らしいところまでできたかと聞いただ

「けで」
堂々巡りである。

「待ってくださいよ。蜘蛛の事件なら僕も関わった。調査をしましたよ。探偵の代わりにあちこち走りまわったんだ。——なんなら僕も読みましょうか。蜘蛛の小説」

本気ではない。事のついでだ。話の流れだ。読んだら読んだで、適当な感想を述べて、この場の空気をちょうどいいくらいに温めて、関口の気分を少しは浮上させ、へらへら笑って——その後で「ところで、僕がここに来たのは、中禅寺さんに教えを請いたかったからなんです。GHQや東京ローズについて、中禅寺さんが知っていることがあるんじゃないかなと知恵を借りに」と話を切り出すつもりだった。

ところが、関口は顔色を変えて狼狽えた。あまつさえ関口らしからぬ素早さで原稿用紙の束をかき集め胸元に抱え込んだ。

「読まないでくれ」

ほとんど悲鳴のような声であった。耳まで赤くして汗をだらだら流して拒絶する。

「なんでですか。人に読ませるための小説でしょう？」

強く読みたいわけではなかったが、だからこそ世辞のつもりだったのだ。「読みましょうか」と申し出たら、照れながらも、いい気になって差しだして感想をもらいたがるのが小説家ではないのだろうか。こんなふうに拒否されるのは想定外だ。

「小説じゃない。小説だと思って持ってきたが、ついさっき小説じゃないと否定された。おまけにつまらない駄作だと云われた。実際、そんなものなんだ。僕には小説なんて書けやしない。僕の目の前でこれを他人が読むのかと思うと、憤死しそうだ。やめてくれ」

いつももしもじと滑舌悪く小声で発言する関口なのに、こんなときだけ多弁で、決然としている。自分を貶めることや、卑下することにかけては巧みなのである。

「関口君。僕は、つまらない駄作とは云っていないよ。よろしくないところがあると云ったんだ」

「同じことじゃないか」

「おもしろいところもあると云った。蜘蛛の話の『風蜘蛛』の登場の部分はとも興味を惹いたし、僕はちゃんとそれは云ったぜ？」

「君が知らない妖怪について僕が言及したからじゃないか。物語の緩急もないし娯楽性は欠片もないと云った。むしろ『この文章ではなにがなんだかわからない。もっとはっきり書き給え』と、僕の文章の不足を細かく指摘して、穴だらけだと文句を云った。君が知っていたのは『風蜘蛛』についてだけだ。それなら小説にする必要はないんだ。カストリの記事にするべきだったんだ。そもそもこの『風蜘蛛』も思いついたのは鳥口君だった。僕との日常話の合間に口から出任せを云ったんだ。それがおもしろいもののような気がして僕は自作に流用させてもらったが——思いつきですら人のものだ。どうせ僕は」

「風蜘蛛ってのは、なんですか？」

益田は会話に割って入った。正直に云えば、関口の小説についての子細は益田にはどうでもいいことなのである。関口が自主的に萎しおれていくのを眺めるよりは、小説の話については切り上げて流れを変えたい。

益田が問うと関口がぼんやりとした云い方で、

「風は、風だ。蜘蛛は、蜘蛛だ」

とつぶやいた。

中禅寺も書物から顔を上げずに補足し答える。

「虫偏に知と虫偏に朱の、蜘蛛だよ。蜘蛛の巣を作る、蜘蛛。チチュウだ」

「チチュウ？」

「蜘蛛は、もとの漢語の音読みがチチュウだったのさ。それに当てはめて漢字を当てたものだから漢字の旁つらの意味はない。古くは違う漢字が当てられていてチチュウは古語では『たちもとほる』と読まれていた。徘徊はいするという意味だ。蜘蛛が蜘蛛の巣を作るときに巢ねのなかを行き来している様子を表したんだらう。虫偏を持つているせいで漠然とみんなが虫であるように思いつき込んでいるが、蜘蛛は本当は虫ではない。それから、風のほうはと云うと、そよそよと吹いてくる、あの風だ。関口君のこの話のなかでは夜に高い場所にひとりしていると『風蜘蛛』という妖怪が現れ、人を惑わし自死を誘うんだ。関口君の創作に

しては妙に背景に書き込みが多いなと細かく聞いてみたら、鳥口君の思いつきに影響を受けたと云うんだな。鳥口君の思いつきならばそれはそうかと思っただが、それでも筆致に引かかる。だから鳥口君からの思いつきを拾って書こうとした関口君なりの、そのとっかかりになったものは何かと聞いてみたらこの始末だ。まともな返事はないんだ。ずっと小説についての泣き言と弁解だ」

鳥口とは、赤井あかい書房という出版社に勤務する、関口とつきあいの長い編集者の名前である。関口が別名義で寄稿しているカストリ雑誌の編集をしていて、猟奇的な事件やほの暗い噂話や芸能界のスタアたちの裏の顔にも詳しい人間だった。

「聞いたことのない妖怪だと云って、京極堂は、僕の小説の中身を早急に切り上げて風蜘蛛の話ばかりを僕に振るんだ」

どうしてか関口は庭のほうへと顔を向けて小声で云う。拗うねているように聞こえる。

すぐ隣だからかろうじて聞こえているが、席が離れて対面だったら耳に届かないような小さなくぐもった声である。

「中禅寺さんが知らない妖怪なんて、いるんですか？」

「いるよ。妖怪と云うのはね、日々、生まれては消えていくものだ。記録に残れば生き延びて誰も記憶を受け継がなければ消えていく。妖怪や憑物つまぶと云うのは人間社会におけるひとつの装置でもあるから、時代に応じて形を変えるし役目を終えれば変容とともに消える

こともある」

「装置？」

「人を羨むとき、嫉妬しつとにかられたとき、人は自分と他人との差異にある格差を埋めるために憑物という装置を置く。憑物は嫉妬の焰ほのおを鎮火する装置でもあるんだよ。『あいつの家が金持ちなのは妖怪のせいだ。憑物が憑いているせいだ』ということにしてしまおうと、己の不運は己が招いたものではなくなるからね。すべては自分に憑物がいないせいで、自分の努力不足のせいではないのだと、自分の外側に理由を見つけられる。そういう便利な使い方もできる」

「便利、ですか」

中禅寺はやつと書物から視線を上げ、益田を見た。どうやら興の乗る会話の流れになつたらしい。

「そうだ。便利さゆえに、特定地域で即席で出来上がり、根付かないまますたれていく妖怪もいる。妖怪というより都市伝説の類いだな。いまこの瞬間にも日本の何処かで新しい妖怪が生まれているかもしれない。といっても僕たちの時代に生まれるかもしれない妖怪も、大本は昔からの妖怪の亜流だろう。人は、自分たちが思う以上に独創性に欠けている。過去の妖怪や過去の神に、いま理解できて信じられる妖怪と神とを上書きさせて幾ばくかの補足を書き足す程度がせいぜいだ。蜘蛛の名を持つ妖怪はいくつかあって、たとえば」

「女郎蜘蛛」

益田がつぶやくと、中禅寺がかすかに顎あごを引いた。

続きは、4月15日発売の富士見し文庫で！

© Teiko Sasaki, Natshiko Kyogoku 2017